



ぷらう61号

発行：TEACCH プログラム研究会

会長のつぶやき

TEACCH プログラム研究会 会長
内山 登紀夫

愛着と自閉症スペクトラム

最近、保育士や心理職、発達障害の支援者、小児科医などの集まりでケース検討をする際に、「この子どもには愛着の問題も考慮しないといけない」「実際には自閉症ではなく愛着障害なのではないか」「必要なのは子どもの療育より、母親指導ではないか」「療育機関を利用するより母子が一緒に時間を増やした方がいいのではないか」などの発言がよく聞かれるようになった。その理由を問うと、「母親の子どもの接し方に愛情が感じられない」「この母親は健診の際にスマホばかり見ている子どもと向き合っていないようだった」「シングルマザーで家庭に問題がある」などの「根拠」が示される。そこで「愛着」の意味を問うと、「母が子どもに愛情をかけていない」と言ったような「母性愛」の意味で使われている。生来性の障害であることが明らかな重度の知的障害を伴う自閉症の幼児を対象とした場合でも同様の発言がなされることに違和感を持った。

愛着という用語が日本で広まったのは、ボウルビーの“Attachment and Loss“(1976)が「母子関係の理論」というタイトルで刊行され、アタッチメントが「愛着」と翻訳されてからであろう。私は今、仏教の大学にいて、門前の小僧で仕入れた知識をいうと、仏教界隈では愛着は「あいじゃく」と読み、「欲望にとらわれて離れられないこと」で、どっちかというとながティブな用語である。

一方、子育て業界では、「あいちゃく」は子どもに愛情かけて育てることを意味しているようで、愛着があることは無条件に肯定されるようだ。

心理学領域でのアタッチメントはどういう意味かという、「特定の他者とひつつくこと」を意味している。筆者の経験では、臨床現場で「愛着の問題がありそう」などと議論されるときは、多くの場合、母親の「育児態度が不適切」であるとか、「愛情が乏しい」などの暗黙の含意になっている。アタッチメントの訳語が「愛着」であっても、アタッチメントと「愛情」は別の概念であるのに両者が同義語のように使われているし、「愛着の問題がある」とは、ほとんどの場合、母親を中心に親の愛情不足であるかのような文脈で語られる。

自閉症スペクトラムと愛着障害は別の障害だが、別の障害だから合併することはありうる。実際の臨床現場では、発達の問題もアタッチメントの問題も両方ありそうなケースに出会うこともある。愛情を持っていても、うまく子どものケアができない親もいるだろう。

私は親が疲弊しているようなら、保育園や児童発達支援事業所などの利用を勧めている。親への助言としては、可能な範囲で良いので家庭の環境を構造化すること、穏やかに接すること、子どもの特性からみて無理なことを要求しないことなどを伝えている。無理をしないほうが良いのは子どもだけでなく親もそうだ。子どもの支援者は親子をセットでアセスメントし、親の負担が大きいようなら負担を軽減するようなサポートをして欲しい。

ASD と愛着障害を合併しているケースにはどのように接すれば良いのだろうか？ ASD に対しては TEACCH モデルに基づいた支援が有効なのは会員にとっては周知のことだけど、反応性愛着障害(強度のネグレクトなどの為に生じる反応性の障害)にも有効だろうと思っていたら、そのまんま取り扱った論文があった。トルコの論文で、ASD と反応性愛着障害の子どもの両方のグループに TEACCH に基づいた指導を行なったら、どちらのグループにも効果があったという報告で、納得できる内容だった(Mukaddes, Kaynak, Kinali, Besikci, & Issever, 2004)。残念ながら英語だけど、興味のある方は読んで欲しい。

Mukaddes, N. M., Kaynak, F. N., Kinali, G., Besikci, H., & Issever, H. (2004). Psychoeducational treatment of children with autism and reactive attachment disorder. *Autism*, 8(1), 101-109. doi:10.1177/1362361304040642

自閉症カンファレンス NIPPON 2019 ポスターセッションに参加して

TEACCH プログラム研究会 常任理事
笠合 竜明

8月24日(土)、25日(日)に早稲田大学にて開催された「自閉症カンファレンス NIPPON 2019」のポスターセッションに、TEACCH プログラム研究会として今年も参加してきました。年間予定や活動内容が記されたチラシを各支部に準備していただき、会のリーフレット等と一緒に設置して、参加者に知っていただく働きかけをしました。

休憩時間になると、ポスターブースには多くの人たちがチラシを手にとって足を止めてくれていました。また、カンファレンスにご参加されていた支部理事の皆さんもブースに集まってくれて、啓発のお手伝いをしてくださいました。自然に支え合うこの会の素晴らしさと温かさを改めて感じることができました。この場をお借りして御礼を申し上げます。

昨年、鹿児島支部が加わり、支部数が16になったばかりでしたが、今年もTEACCH プログラム研究会全国地図に新たに色を塗ることができました。岡山支部の設立です。これで17支部となりました。川崎医療福祉大学がある岡山県にいよいよ支部が立ち上がったことは本当に感慨深いことです。天国の佐々木先生も喜んでくれているのではないのでしょうか。もちろん、まだまだ会が無い地域はありますが、着実に広がりを感じています。自閉症支援が地域に根付いていくことを切に願うばかりです。

毎年ブースにチラシやパンフレットを設置して感じることは、「TEACCH プログラムについて身近に学ぶ機会が欲しい」というニーズが多いことです。我々TEACCH プログラム研究会は、このようなニーズの受け皿となれるように、支部としての活動を本部と連動しながら広がりを持てるようにしていくことが重要であると思います。

これからも地域に根付く活動を進めていき、一人でも多くの当事者や支援者にとって学び支え合える環境を整えていければと思います。そして、今回パンフレット等をお忙しい中ご準備いただきました支部の皆様、本当にありがとうございました。



事務局からのお知らせ

TEACCH プログラム研究会 事務局

令和 2 年度総会のご案内

日 時： 2020 年 2 月 22 日(土) 16時45分～17時30分
※コラボレーションセミナー2020 1 日目

場 所： 京都産業会館ホール 北室(京都経済センター2 階)

皆様からいただいております大事な会費の執行状況や、本部の活動等についてご報告いたします。TEACCH プログラム研究会は、会員みんなで作っていく会です。ぜひご出席ください。

会費納入のお願い

令和 2 年度の会費の請求書について、届き次第、郵便局決済またはコンビニ決済にてお支払いをお願いいたします。なお、通常、年会費額は 4,000 円ですが、前年度までに過払いや不足があった場合、その差額が翌年度に請求されることとなりますので、ご了承ください。

期限内の納入にご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

TEACCH コラボレーションセミナー 2020

切れ目のない支援をめざして ～早期療育から学校教育、そして成人期への移行～

今回のコラボレーションセミナーでは、幼児期、学齢期、青年期、成人期などのライフステージにわたって、切れ目のない一貫性のある支援を実現するために私たちは何ができるのかということを考えていきたいと思います。ノースカロライナからは、幼児期から就労支援まで幅広い年代の支援にかかわっておられるカラ・ヒューム先生をお迎えして、TEACCHの家族支援も含む幼児期療育プログラム、高校から就労への移行支援プログラムなどについてお話していただく予定です。そして、TEACCH研のメンバーから日本の実践を紹介してもらい、意見交換しこれからの実践へのヒントと元気をいただきたいと思えます。

このセミナーは会員外の方の参加も可能です。会員の方はもちろん、非会員の方にもお声かけいただき、貴重な機会を共有できればと思います。

講師： **カラ・ヒューム 氏** (Dr. Kara Hume)

ノースカロライナ大学チャペルヒル校教育学部准教授
フランク・ポーター・グラハム子ども発達研究所上級研究員

幼児期の自閉スペクトラム症の子どもに対して家庭訪問などの家族への支援を積極的に行う FITT プログラム (Family implemented TEACCH) の実践や研究、高校から就労など成人の社会生活への移行を支援するプログラムの実践、TEACCHの初任者研修 (トレーニングセミナー) の効果検証研究など幅広く自閉スペクトラム症の支援にかかわっておられます。

日程： 2020年2月22日(土) / 23日(日)

会場： 京都産業会館ホール (京都市営地下鉄四条駅、阪急京都線烏丸駅より徒歩2分)

会費： TEACCHプログラム研究会会員 8000円 一般 14000円

プログラム

■1日目 講演 カラ・ヒューム 氏

『切れ目のない支援をめざして～早期療育から学校教育、そして成人期への移行』

■2日目 実践報告とディスカッション

TEACCH研の会員から、切れ目のない支援を作るための日本の実践を報告し、カラ・ヒューム先生を交えて情報や意見の交換を行います。

- 1 「大阪府における発達障がいがある子どもたちへの療育システムについて」
須川明子 社会福祉法人三ヶ山学園 自閉症児支援センターWave /大阪支部
- 2 「地域の小児科クリニックで取り組む幼児期から青年期の ASD 支援」
山田理恵 医療法人双優会 つつじが丘こどもクリニック /愛知支部
- 3 「重度知的障害を伴う ASD 成人のショートステイ利用の連携について」
藤田修司 清瀬育成園ひだまりの里きよせ /東京支部
高橋朋子 東京都立田無特別支援学校 /東京支部
- 4 「発達障害をめぐる地域支援体制の評価—その経過から見えてきたもの—」
今出大輔 おかやま発達障害者支援センター /岡山支部

※ 1日目終了後交流パーティーを開催しますのでお気軽にご参加ください (参加費 4000円)

詳細は同封のパンフレットを御覧ください